



救ってくださった後に、多くの国々がその話を聞きに来る。そして捧げ物を持ってくる。宝物を持ってくるというその時代のそういう意味ではヒーローになったようなものですね。一番大きい国の王様と戦って勝ちましたということなので、その受けた恵みに報いることをせず、高ぶってしまったということが、その理由で「病になって死にます」と言われたということのようだということが、この箇所からわかります。

しるしも賜りましたというしるしが、アハズの日時計というところですね。それは38章のところにあります。そのしるしがあつて、心高ぶって、心高ぶったんですけれども、悔い改めて、ヒゼキヤのその病が治った後の祈りにあるように、「悔い改めました」と。それは、エルサレムの住民も同じようだったということが書いてあります。

それで栄華を極めて、ソロモンみたいですね。財宝が集められて、31節に先ほどのイザヤ39章の話が短く書かれています。「バビロンの君たちが使者をつかわして、この国にあったしるしについて尋ねさせた時には、神は彼を試みて彼の心にあることをことごとく知るために、彼を捨て置かれた」と書いてあるんですけども、「しるしについて尋ねさせた時に試みた」という言い方は、この39章が試みだったという前提だと思うんですけども、「しるしについて尋ねさせた。それは、神は彼を試みて」ということでしたよ」というこの「しるしと心、心、しるしと心」というこの病になって試されたということについて、バビロンの王たちが聞きにきたわけですから、病が治ったということを知って、バビロンの王が手紙を送ってくれているということですから、このしるしについて尋ねさせた、しるしの説明が、神様が離れて心にあることを知るためだったという25から26節。病の話がここ(31節)で言われているんだろうと。

その「試して心にあることをことごとく知るために」というのは申命記の8章に書かれていたりするものですので、確かに神様が試みて、心にあることはどうなのかを試しているという言い方は、そんなに多くはないんですけども、この申命記8章は特にそのこと表してますよね。ですから同じようなことだと思うんですけども、その試されたことは、この病になつてこの方(31節)の話だろうと思われまます。

王のところに贈り物を持ってきて見せるという話は、第2歴代誌の9章で、ソロモンのところにシェバの女王が来ます。そして、何でも欲しいものをあげましたという贈り物をシェバの女王も持ってくるんですけど、ソロモンも「何でも欲しいと言ったものをあげました」というふうに書いてありますので、その全部を見せること自体が悪い、非常に傲慢な行為だというよりは、その出来事をきっかけに、これから起こることをイザヤはヒゼキヤに伝えたということだと思えます。

それで、その伝えられたことは良い。主の言葉は良いと。「少なくとも」というふうに別に書いてあるわけじゃないですね。「世にある限り平和と誠、命のある限り主の家で歌う」ということと似ていますので、特に自分だけのことを言っているわけではないでしょう。

自分が死ぬまで世にある限り平和でしたというのは、ソロモンもそうでした。ソロモンも偶像礼拝の罪に陥った時に、父ダビデに免じてあなたが生きている間は平和ですと言われている。

このあと出てくるヨシヤもよく戦いましたので、「あなたは滅びるのを見ることはない」と言われます。ヒゼキヤはソロモンに似ている者としても出てきますので、そのことを連想するのは良いかなと思うんですけども、特にこの自分中心に言っているという話ではないだろうと思えます。

6、7節に対して「主の言葉は良い」というのは、非常に不思議な感じがするんですけど、このあとすぐですね。40章から66章まではバビロンに連れて行かれます。連れ帰る新しい天と地が作られるという予言ですね。

それはイザヤの予言なんですけれど、じゃあ、いつそれはヒゼキヤに言われたのかということになりますよね。ただ単に、イザヤが書いたわけじゃないですから。そうすると、この6、7節が要約で、この40章から後ろに言われていることを全部聞いた上で「主の言葉は良い」と言っているのかなというのが、今考えてるところです。

40章から66章までは、バビロンに連れて行かれるけれども、連れ帰られて新天新地が作られるということですので、それをこのしるしが与えられた時に、イザヤがヒゼキヤに伝えている言葉と。この出来事をきっかけにということなのかなと。いずれにしろ、このバビロンの王様が来たことと、この後のことは、つなぐストーリーになっていますので、わざわざここにバビロンの王様が来ましたということが書いてあるわけですけども、この6、7節の内容が40章からのところなんじゃないかなというように思っています。

アサ王という人も、この時代よりも200年ぐらい前の人ですけども、この人も神様に礼拝の改革をして生け贄を捧げたような感じですよ。たくさんの生け贄を捧げて主に仕えたんですけど、このアサ王は残念ながら最後は神様から離れて、預言者の言うことを聞かないで、最後病気になりました。病の時になっても神様を求めないで、医者を探しましたという残念な終わり方をしていますけれども、人生の終わりに取り扱いがあるかのような感じです。ダビデもそうでしたよね。人口調査した。このヒゼキヤも同じような最後の試みに会いますけれども、ヒゼキヤは見事に神様の元に帰って、その働きを全うしたということなんだろうということで、ここの第2歴代誌の32章のところを見ると、このバビロンの王の話は、ここで聞いているのは、このバビロンの王たちが来たことが試みに会っている話じゃなくて、この病にあった後のところの話をしているんだろうというように思われます。